

第 32 回(2010. 2. 11 配信)

雲竹齋先生の歴史文化講座 - 「巳は蛇」

十二支の「巳」は、古代中国では「巳(い)」とって、「止む」の意味があり、植物の成長が頂点に達した状態を指す言葉だったが、これに動物の「蛇」を当てはめたものだろう。

日本でよくお目にかかる蛇は、ヤマカガシ、アオダイショウ、シマヘビ、ニホンマムシやハブなどだが、蛇は変温動物だから、冬は冬眠するので暖くならなければ出てこない。分類学上は、トカゲと同じ爬虫類だが、ワニやカメの仲間でもあるように、大昔は両生類から分かれたものだから泳ぎは得意である。世界におよそ二千数百種の蛇が生息しているが、日本にはおよそ40種類といわれて、その内約10種類はウミヘビである。ウミヘビは猛毒を持ったものが多いが、陸蛇でもマムシとかハブは毒蛇として知られている。現在は、血清や治療法が進化しているし、人々も注意するようになってきたので、被害が少なくなってきたが、ハブよりもマムシの方が毒は強力である。しかし、噛んだ時の毒の注入量がハブの方が多いためダメージが大きい。毒蛇の特徴は、大きさにはあまり関係はないが、大体は派手な色や模様を持った蛇に多いようだし、また頭部が三角形の蛇に多いと一般にはいわれている。野山だけでなく街の中でも、濃い化粧で派手な服装のお姉さんや、目を三角にしたパンチパーマのお兄さんに出会ったら注意しよう。

蛇は邪悪なもの

蛇が昔から邪悪のものとして嫌われるのは、『旧約聖書』にはエデンの園でアダムとエバ(英語読みではイブ)に、禁断の木の実を食べるようにそそのかしたのが蛇だったからだとされているからだが、これほど人間から忌み嫌われているのは、太古に人類が蛇に相当嫌がらせをされたことがあって、その遺伝子が現在のわれわれに受け継がれているのだろう。しかし、日本では昔から蛇(特に白蛇)は弁天様のお使いとして知られているし、蛇は家の守り神だから、屋敷に住み着いた蛇は殺してはならないと、古くからのいい伝えもある。弁天様のお使いだとする信仰や、病気を媒介するネズミや害虫などを補食する天敵だから、そのようにいわれているのかもしれない。また、蛇が脱皮していく様が、何となく出世していくように見えて、財産を呼び込むから弁財天のお使いにふさわしいようだ。そこで、蛇の皮を財布に入れておくと金持ちになるといって、巳年の人は金持ちになると言われている由縁なのだが、それはまったくの迷信だ。なぜ迷信かといえば、この雲竹齋は幸か不幸か巳年の生まれだ。巳年の人は金持ちになるといわれて何十年も期待して生きてきたが、未だ貧しい生活を送っているから確かである。

『旧約聖書』だけでなく、世界中に蛇にまつわる伝説がある。日本の神話にはスサノオノミコト(建速須佐之男命/素戔嗚尊)が八岐大蛇(やまたのおろち)を退治した話がある。これは、出雲の斐伊川の氾濫(八岐大蛇)を防ぎ、稲(クシナダヒメ:稲田姫/奇稲田姫)を救ったことが神話になったのだろうと言われているが、このような英雄が大蛇を退治した話は世界中にある。また、安珍・清姫伝説も有名で、出典は平安時代末期の『今昔物語集』らしいが、僧安珍に裏切られた清姫が蛇に化身し、紀州道成寺の釣鐘の中に隠れた安珍を鐘に巻きついて焼き殺すという話である。これは能の演目になり、能から歌舞伎の『娘道成寺』、浄瑠璃の『道成寺』となって、今日に伝えられている。ほかにも、依藤太(たわらのとうた)が三上山のムカデ退治をした有名な伝説があるが、この依藤太は藤原藤太秀郷(ふじわらのとうた ひでさと)という平安時代の武将で、平将門(たいらのまさかど)を討ち取ったことで有名になった。弓の名手であった秀郷は、瀬田の唐橋に横たわって通行の邪魔をしていた大蛇を踏みつけて渡ったが、その夜琵琶湖に棲む龍神が若い娘に姿を変えて現れ、三上山に棲む大ムカデに苦しめられているので、大蛇に姿を変えて強い侍を探してい

たのであるとって、その大ムカデの退治を頼まれる。秀郷が三上山に行くと、大きなムカデが山を7巻き半して稲光を発し、数千本の足にはそれぞれ松明を掲げて現れた。さっそく、2本の矢を射かけるのだが大ムカデには通じない。そこで3本目の矢の矢じりに唾を吐きかけて射ると、その矢は大ムカデの目を射抜き、ようやく退治することができた。秀郷は、龍神から米が尽きない俵と、思いのまま食べるものが出てくる鍋と、いくら裁っても尽きない絹の巻物をもったが、「平将門の乱」の時には龍神から黄金の太刀と鎧を貰い、将門の弱点を教えてもらって、将門を討ち取ったという伝説である。秀郷は近江の国(滋賀県)田原の藤原家の長男に生まれたから「田原の藤原の太郎」の意味で、田原の藤太から俵藤太と呼ばれたという説と、龍神から貰った俵にちなんで俵藤太と呼ばれたという説があるが、こうして藤原秀郷は英雄になり、秀郷の藤原家は源氏や平氏と並ぶ武家の棟梁になったのである。以来、この一族郎党は、合戦で名乗りを上げる際には必ず自分の名前の前に「その名も高い俵藤太藤原秀郷の子のそのまた子の」と付けたが、一族ではない者も便乗して名乗った。余談だが、徳川家康も売りだしたころは藤原の子孫だと言っていたらしいが、頭角を現しだしてからは源氏の子孫だといいだした。たぶん「征夷大將軍」の称号が欲しいからだったという説が強い。もっとも、この称号は源氏でなくても与えられたのだが、「保元・平治の乱」で活躍し、武家の棟梁とうたわれた八幡太郎源義家(はちまんとろう みなもとの よしいえ)の子孫だといった方が貰いやすかったのかもしれない。戦国乱世を生き抜くのは涙ぐましいことだった。まあ現代も同じか。

精力剤

その昔、雲竹斎は群馬県の山の中で農家まわりをしていたが、そのころの農家では、マムシを焼酎に漬けて精力剤として珍重していたから、どこの家にも一升瓶に漬けたマムシ酒が何本かあった。雲竹斎もしょっちゅうご馳走になったものだが、そのおかげでか、今では焼酎が飲めない。酒の席になると、必ず「まずはビールで、後は焼酎！」という人が多いが、雲竹斎は焼酎は飲みたくない。「健康には焼酎が一番だ」などとしたり顔でいう大酒飲みもいるが、しよせん焼酎だってアルコールである。なにが健康にいい、だ！それはともかくとして、マムシを見つけた村人たちは、先端が二股に分かれた杖で、蛇の首を押さえつけて捕まえてしまう。また、石垣や岩穴などに潜りかけた蛇は、堅い角質の鱗で覆われているので穴に鱗を逆立てて抵抗するから、尻尾をつかんで引っ張っても出てこない。ちょっと手を緩めてやると、蛇は鱗を納めて穴の奥に入ろうとするので、そのタイミングをつかんで引っ張り出すのである。マムシ酒を造るには、蛇を瓶に入れてしばらく餌を与えないで置く。胃の内容物が消化するのを待つためだが、速く造るには、腹を裂いて胃の内容物を取り出して焼酎に漬ける。薫製にしたり焼いて食べたりする場合は、頭から皮をむき始め、首に紐を巻き付けて樹に吊し、体重をかけて一気に皮を引きむく。これをぶつ切りにして炭火で焼くのだが、ぶつ切りにされても筋肉がむくむくと動いていて、これなら精力剤として珍重されるわけだと納得する。雲竹斎が経験したところでは、一般的にはアオダイショウは青臭い。ヤマカガシは不味く、シマヘビが一番美味いようだ。次がマムシというところか。

山道を一列で歩いているときに、先頭の人が寝ている蛇を棒で叩いてしまったら、怒った蛇が噛みつくが、そのときは先頭の方は通り過ぎてしまい、結果的に2番目の人が噛みつかれる。実際に、雲竹斎が山道を3番目に歩いていた時の話だ。前の人の踵に紐のような物がついていたが、よく見たらそれが蛇だった。その人は歩きにくかったのだろう。足をぐいっとひねったら、靴の踵に噛みついてた蛇は、こじった足で地面に顎をこすられて離れた。痛かったらしく、ぴんぴん跳ねていたが、怖くて思わず悲鳴を上げ、飛び上がったことを覚えている。とんだ「とぼっち」なのだが、世間にもよくあることだ。余談だが、この雲竹斎は、人生でも先頭に立てなかったので、これまで他人のとぼっちばかり受けてきた。